

7. 沖合底魚資源調査

1) 沖合底魚資源動向調査

倉長 亮二

目的

沖合底魚資源の永続的利用と沖合底びき網漁業の経営安定に資するため、山陰沖における有用資源の資源動向を把握する。

方法

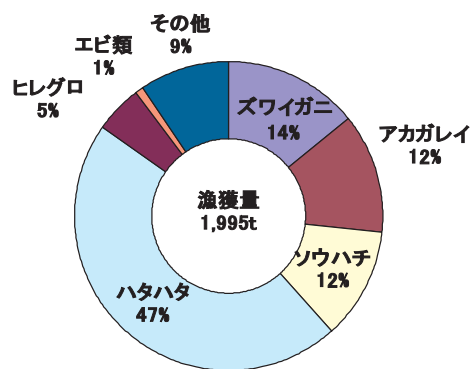
鳥取県の沖合底びき網漁船が所属する地区（賀露、網代、田後）の漁獲月報及び漁船勢力を集計し、漁獲の変動を把握した。

結果

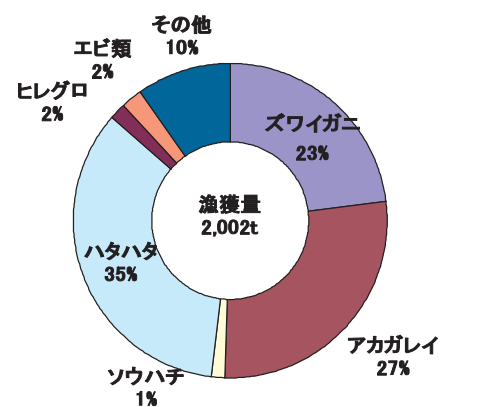
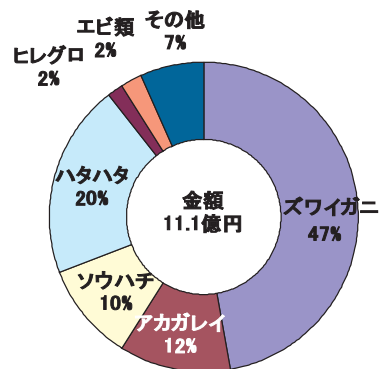
2006年の本県沖合底引網の地区別漁獲量、金額を集計し、図1に示した。賀露の総漁獲量は1,995tで、3地区内で最も少なく、その内訳はハタハタ47%、ズワイガニ14%、アカガレイ12%及びソウハチ12%で、この4魚種が漁獲の主体を占めている。また、漁獲金額は11.1億円であったが、そのうちズワイガニが47%を占め、以下ハタハタ20%、アカガレイ12%、ソウハチ10%となっている。網代の総漁獲量は2,002tでハタハタが35%、アカガレイが27%、次いでズワイガニが23%でこの3魚種が漁獲の主体となっている。また、総漁獲金額は13.7億円で、そのうち41%はズワイガニで以下、アカガレイ30%、ハタハタ17%となっており、他の2地区に比べ、アカガレイのウェイトが高いことが判る。田後の総漁獲量は2,965tでその内訳はハタハタ26%、ズワイガニ21%およびソウハチ10%であり、その他にアカガレイ、ヒレグロ、エビ類を漁獲しており、その他の魚種の占める割合も高く、他の2地区に比べ多様な魚種を漁獲していることが判る。一方、漁獲金額ではズワイガニが47%を占め、他の地区同様、非常に高いウェイトを占めていることが判る。しかし、それ以外の魚種については全体の1割以上を占める魚種はなく、漁獲量と同様の傾向となっている。

次に、地区別に魚種別漁獲量、金額の年推移を図2に示した。賀露では1980年前後に2,000tから2,500tを漁獲していたが、その後減少し、2004年には1,430tまで落ち込んだが、ハタハタの漁獲量の増加等により、2006年は1,995tとなった。また、漁獲金額は1990年代前後が最も高く、1986年及び1991年に

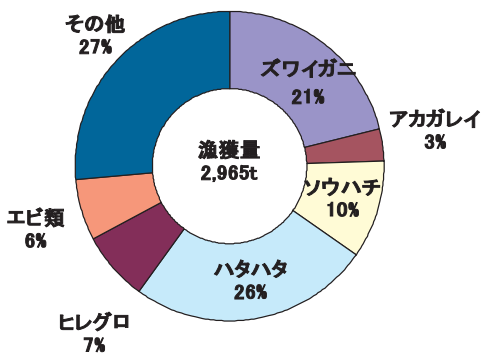
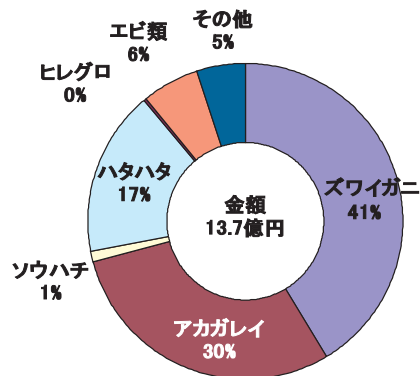
21億円を揚げている。しかし、その後は減少傾向にあり、2005年は10.9億円にまで減少した。2006年はハタハタ、アカガレイ、親がにの増加により、11.1億円の水揚げとなった。網代の漁獲量は1981年の2,319tをピークに減少し、1986年には1,256tまで落ち込んだが、その後は増加傾向にあり、2006年は2,002tであった。一方、漁獲金額は賀露と同様に1990年前後が高く、1991年には21.3億円を水揚げしている。しかし、その後は減少傾向にあり、2004年には12.6億円にまで減少した。2006年はアカガレイ、ハタハタの増加により13.7億円の水揚げとなった。田後の漁獲量は1990年前後がもっとも低く、1985年には1,254tまで落ち込んだ。その後は増加傾向にあり、2005年は2,981tとなった。2006年はやや下がり、2,965tであった。一方、金額は田後においては統計を取り始めた1975年以降増加傾向にあり、2006年は21.3億円で過去最高の水揚げ金額であった。



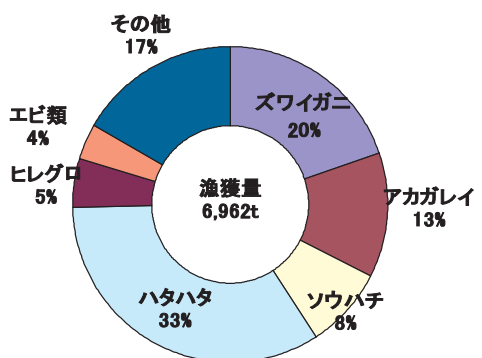
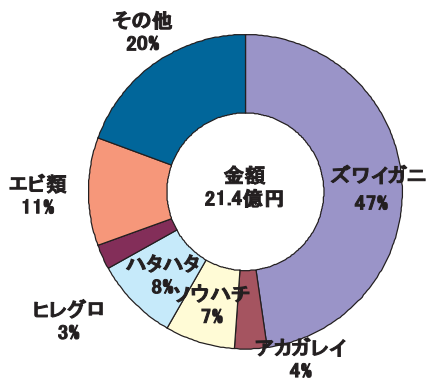
賀露



網代



田後



合計

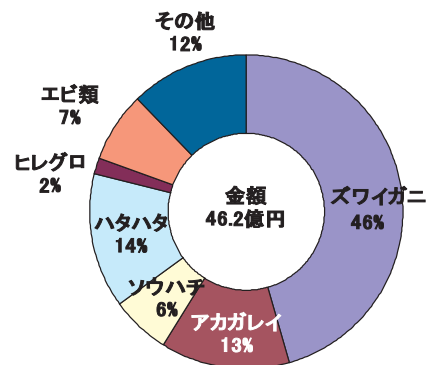


図1 地区別魚種別漁獲量、金額

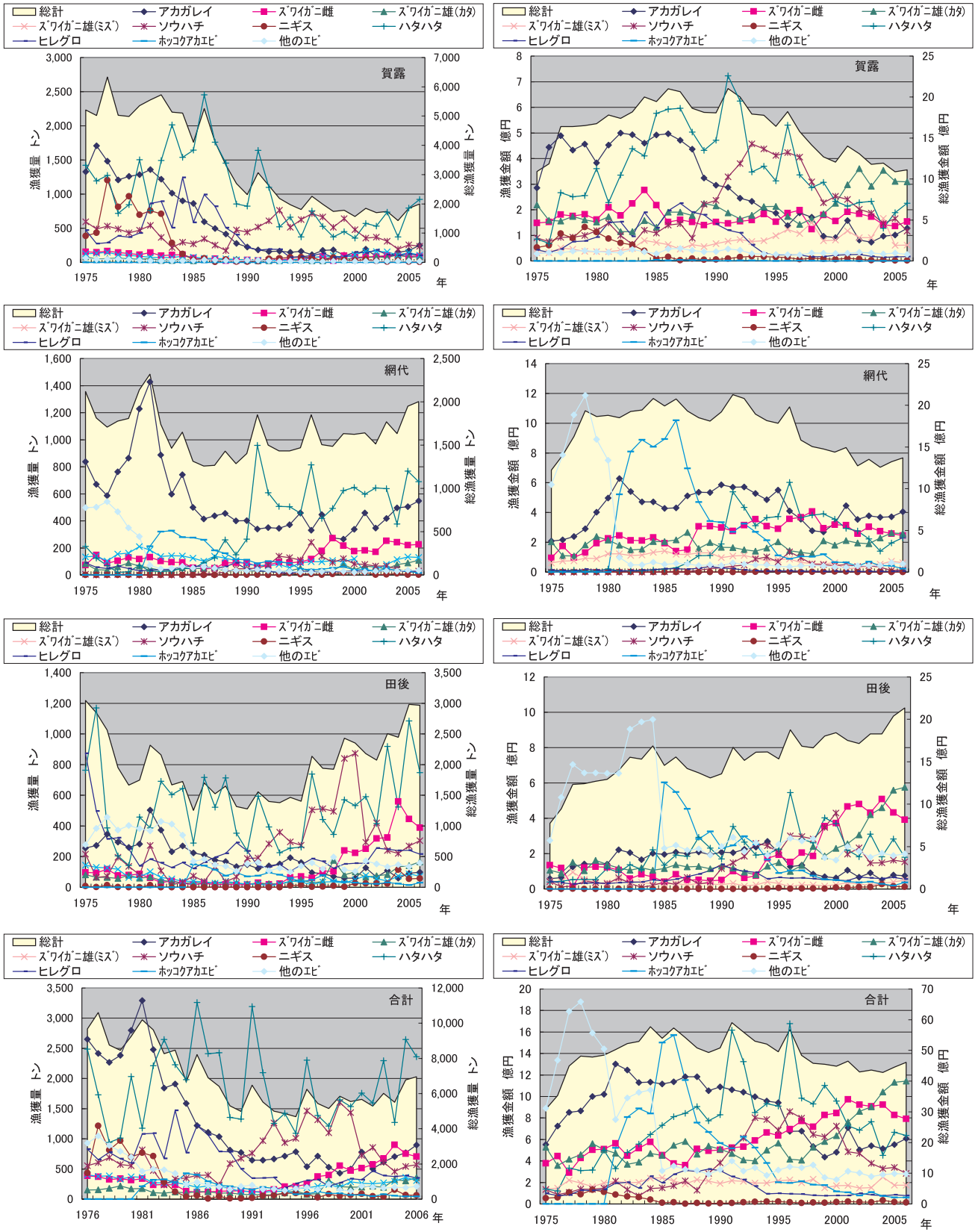


図2 地区別魚種別漁獲量、金額の年推移